とある戦国漂流

ヨッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある戦国漂流

【Ｎコード】
Ｎ２１１９Ｙ

【作者名】
ヨッシー

【あらすじ】
ある日、上条は神奈川県にある新築の実家にいる両親に呼び出された。そこにタイミングよく学園都市第３位超能力者のこと御坂美琴が帰郷が重なる。二人はとある部屋で封印されていた巻物と刀を見つけて封印を解かれてしまった。その時、先祖の霊を覚め２人を戦国時代に飛ばしてしまう・・・・だが、飛ばされた戦国時代の名高い武将たちはほとんどが女性だった・・・

始まりの家系図（前書き）

こんにちは！ヨッシーです！

最近、読んでいる小説で『織田信奈の野望』を読んでおりまして、禁書目録と合わせること出来るのでは・・・と思い、気まぐれで書いてみました！

初めは恋姫でもいいな～～～と思いましたが、本郷がフラグを立ててしまい、上条さんの一級フラグ建築ができないと思い・・・・時を戦国した女だらけの時代にしてみました！！

原作主人公の相良良晴も登場、二人の国取り・・・いや、旗取り（フラグ）合戦がここに始まります！

さて、上条当麻は戦国の世を駆け抜けることができるのか！！

では本編どうぞ！

始まりの家系図

始まりの家系図

とある住宅街

刀夜「お～～！当麻！帰ってきたか！！」

詩菜「あらあら、当麻さん、お帰りなさい」

当麻「あ・・・・た・・ただいま」

とある日・・・上条当麻は両親にいきなり呼び出され、学園都市から神奈川県にある実家に帰ってきた。当麻本人はあのインデックスの事件により記憶が消されてしまい、ふるさとという気持ちが今少し湧いてこないでいた・・・・・

刀夜「ん？当麻どうした？なんだか他人の家に来たような顔して？」

当麻「あ・・・！悪い、父さん・・学園都市にずっと暮らしていたからなんだか感覚がおかしくなってて」

詩菜「あらあら～でもそうね。お家が新しくなったんだから仕方ないわね」

当麻「あははは・・・たしかにそうだね。母さん」

夏休みのエンゼルフォールの事件で新しく作った家は吹き飛んだが・・・・最近になり再建が終了し両親はここで暮らし始めているのだ。

当麻「ところで父さん、母さん。こんなときになんで俺を呼んだんです？新しい家の紹介のためかい？」

刀夜「まあ、そんなところだ。久しぶりに親子水入らずの時間を過ごしたいからな！いいだろ。当麻？」

当麻「あ・・・ああ（やべ～～～俺、記憶ないことバレちまいそうだ）」

刀夜「よし、話は家の中でじっくり話そう！・・・お！」

当麻「どうした・・ん？・・・・・うっ！？」

詩菜「あら？」

早速、新宅に入ろうとした上条ファミリーの目線の先には・・・・・！！

美鈴「どうよ。美琴ちゃん！久しぶりに帰ってきた実家の感想は！」

美琴「な・・なにそんなにハイテンションなの？」

美鈴「ふふん～～♪それはね～～・・・あ！お～～～い！」

美琴「ねえ、誰に手を振って・・・げっ！？」

美鈴「グットタイミングだったわね～～」

御坂ファミリーのお二人さん。なぜかこのタイミングで現れた！

美琴「なんであんたがいるのよ！？」

当麻「なっ！？御坂！？なぜここに！？」

美琴「それはこっちのセリフよーーーー！！」

美鈴「うふふふ・・・当麻くんのご実家は実は家のお隣なのよね～～」

美琴「ちょ！？なんでそれを言わなかったのよ！？」

美鈴「え～～～だって普通に言うのはつまらないでしょ？」

美琴「この馬鹿母・・・」

仲良くケンカする母娘を不思議そうに眺める上条家の一同・・・しかしそこに空気を変える漢が一人・・・

刀夜「お出かけの帰りですか？なら、うちでお茶でもいかがです？」

美鈴「あら、いいですね。お言葉に甘えさせていただきます」

詩菜「美鈴さんと・・・え～～と、美琴ちゃんでしたっけ？」

美琴「あ・・・はい」

詩菜「遠慮せずにどうぞ。お入りください」

さすが上条夫婦、その場の空気を一瞬にして変えた。だが、当麻と美琴の空気は今だ暗い・・・・

1時間後

当麻「はあ～～～なんで大人ってあんなに話好きなんだ？それに・・

はあ～～～」

美琴「何私を見て、2度もため息してんのよ。」

当麻「いや、何となくしたくなった」

大人の空間から脱走した上条当麻は上条家の家を捜索していた。美琴も一人でその場にいるのが耐え切れないため、当麻に付いてきたのだった。

美琴「で？これからどうするの？」

当麻「そうだな～～ここには初めて来たし、家の中を探索するか」

美琴「あんたの両親がここにきたのは最近っていてわよね」

当麻「そうらしい。俺は詳しいことはわからんが、自分の家くらいは覚えておきたいし」

美琴「あ・・あんた、記憶がないのよね・・・親に話さなくていいの・・・」

美琴は当麻が記憶喪失のことを知っていた。あの夜のときにはっきりしたのだ。暗闇の道で怪我のことを関係なく。仲間の助けに向かう上条当麻の本質と本心も・・・・

当麻「言ったら悲しむだろ。それなら言わないほうがいいだろ」

美琴「でも」

当麻「俺はどれだけ傷ついていいが、他人が傷つくところは見たくないからいいんだ」

美琴「・・・・・・」

ガチャッ

当麻「ん？この部屋はまだ整理されてないのか」

美琴と会話しながら家の奥の部屋を開ける・・・中にはまだ整理されていないダンボール箱の山が連なっていった。

当麻「すげぇ、ダンボール箱の山だな～」

美琴「そうね。ホントに最近、引っ越してきたって感じね・・・そうだ！」

当麻「！！・・・どうした？」

美琴「ねえ、ここにあんたの昔のことに関するアルバムとかありそうじゃない？」

当麻「ん・・・まあ、あるんじゃないかな」

美琴「なら、探さない？あんたの過去？」

当麻「え・・・・」

美琴「べ・・・べつにあんたの過去に興味あるわけじゃないわよ！」

当麻「御坂・・・おまえ・・・」

美琴「な・・なによ！？」

いきなり真面目な眼差しで美琴は少し赤面になる

当麻「そんなに俺の恥ずかしい過去を掘り出したいのか」

バチバチ！！

当麻「うお！？」

バキン！

当麻「図星・・・かよ」

お約束の電撃にいつものように右手で回避する。長い付き合いのためか当麻は意外と冷静である。

美琴「ああ～～～もう、あんたは不自由と思わないの？少しでも昔のことがわかれば、あんたの両親を誤魔化しやすくなるでしょ！」

当麻「ああ！なるほど」

そんな考えが思いつかなった記憶喪失の少年は平手に拳を叩き、納得する。

美琴「たく・・・にぶちん（でも、こいつの過去があるしな・・・）」

理由はどうあれ、二人は部屋の中のダンボール箱の中を物色し始めてた・・・・

数分後

美琴「なかなか見つからないわね」

当麻「まだ山（ダンボール箱）は半分も残っているな・・・正直だるい」

美琴「って、なんで私が本気で探して、アンタはやる気がないのよ！」

美琴が必死に探しているのに当麻はやる気なくダンボールの中身を探す・・・

当麻「お！？」

美琴「見つかったの！？」

当麻「こ・・これは・・・」

美琴「なに？何を見つけたの！？」

何かを見つけたようだが返答がこないため、ダンボールの山裏にいる上条の所に行く・・・そこにはダンボールではなく長い木箱から何かを取り出した上条の姿があった。

当麻「これ・・・って・・・日本刀だよな・・・」

美琴「ちょっと！ちゃんと探しなさいよ！」

当麻「ん？ああ・・・アルバムは見つからなかったが、こんなの見つけた」

美琴「何？この古い木箱は・・・」

当麻「日本刀と同じ場所に置いてあった」

当麻の足元には日本刀が入っていたと思われる木箱ともう一つ、ものすごく古く鍵の掛かった木箱が置いてあった。

当麻「父さんが集めたお土産コレクション・・・にしてはかなり大切に保存されてたようだな」

美琴「へえ～～～あんたのお父さんはそういう趣味してんの？」

当麻「まあ、夏のときの趣味の熱中ぶりには手が焼いたよ・・・・色々と」

美琴「ねえ、その日本刀見せてよ。なかなかオシャレじゃない」

当麻「ちょっと待て・・・そう焦るな・・・って・・・・うわ！？」

バキリ！

当麻「いてーーーーーー！！」

美琴「ちょ！？なに箱を壊してんのよ！？」

美琴が当麻の持つ日本刀を無理やり取ろうとした瞬間、当麻は転倒してしまい、足元にあった鍵付きの木箱に頭を打ち付け、箱は簡単に砕け散った・・・

当麻「いたたた・・・・あれ？なんだこれ？」

今まで封印されていたものが姿を現した・・・

美琴「なにかの巻物？」

当麻「え～～～と・・・『上条家系図』・・・って、え～～～～～！？」

美琴「なんかすごいものが出てきちゃわね」

当麻「と・・とりあえず、中を確認しよう！」

二人は恐る恐る、巻物を開いていく・・・・巻物にはまるで地面に根を伸ばすような形で枝分かれをするご先祖の名が刻み込まれていた。

美琴「へぇ～～～あんたのご先祖さん、多いわね」

当麻「ええい、なんて長い家系図だ。俺って上条家の何代目だよ。わかりやすく代数を書いとけっつーーの！」

ながいなが～～～い家系図は数十メートルにおよびやっと、上条家を作った初代の先祖のところまでたどり着いた。

当麻「ふう～～～やっと、初代か。さて、ご先祖様のお名前をはい

け・・・ん・・・・・・・・・・ちょっ！？なんだよこれ！？」

美琴「どうしたの！？ちょっ！？え～～～～～～！？」

二人はお互いに同じ反応をした。これを見て驚かないわけがない。

初代ご先祖・・・いや、上条家の総本山の名前が・・・『当麻』とクッキリハッキリと書かれている。

美琴「ちょ・・これ何かの冗談よね？」

美琴はそれだけではなく。もう一つの名を見て、今まで味わったことのない衝撃を受ける・・・その初代当麻の妻の名前に『美琴』と書かれていたら、同じ名の人間が驚かないはずがない。

美琴「なんで・・・・これって偶然にしては・・・・ちょっと・・・・あれ？当麻？」

ガラ！

美琴「ちょっと！」

上条当麻「離してくれ！なんだか俺は死にたくなってきた！」

ちなみに現在上条たちがいる奥の部屋は実は2階部屋なのだ・・・
当麻はいろんな意味で現実逃避し始め、近くの窓を開け飛び降り自殺しようとしたが、美琴に羽交い締めで止められる。

美琴「だからって飛び降り自殺なんてやめなさい・・・・って、それって、私と結婚したのがそんなにいやなのか。コラーーーーーーーーーーーっ！！」

バリバリバリ！！

当麻「ぎゃあああああああああ！ふこう～～～～～だーーーーーーーッ！！」

美琴の逆ギレで思いっきりの電撃を食らう上条当麻！

ちなみに上条がいきなり思い切った行動に出た理由は美琴という名が書かれていただけではなく。その初代は妻が複数おり、かすれて読み取れないが・・・・

美琴
火―
―和

ｏｒ――などなど

身に覚えがある名前の部分と完璧な外人だが、なぜか知っている人物に近い名がズラズラと巻物からはみ出しそうに書かれている。確認できて数十人！まるでどこぞのお殿様！

まるで未来の自分が鬼畜道に落ちるような予感がして、現実から逃げたくなったというわけ・・・・

数分後

当麻「ま・・まだ痺れが抜けない・・・・」

美琴「ふん！自業自得よ」

当麻「何怒ってんだよ」

美琴「べ～～つ～～に～～」

美琴さんはまだ機嫌が治っていない。当麻はなぜ起こっているかは解るわけなかった・・・・

当麻「え～～～と、初代の上条当麻は・・・・誕生日は不明・・・・死没が慶長３年８月―日・・・・けいちょうって、いつだっけ？」

美琴「慶長は１５９６年～１６１５年の元号のことよ。簡単に言えば戦国時代の末期か江戸時代の初期よ」

当麻「ふ～～～ん、上条家は戦国時代からお家が始まったのか・・・」

美琴「ねぇ・・・」

当麻「どうした」

美琴「あ・・あんたって、もし、初代のご先祖さまと同じ名前の女の人と・・け・・・結婚するって話になったらどうする？」

ドドドド！ガラ！ガシッ！

美琴「なんで返事じゃなく。行動で示すのよ！」

当麻「逝かせてくれーーーーーー！！俺は鬼畜道に堕ちたくなーーーーいーーーーッ！」

言葉ではなく行動で示す上条当麻の飛び降り自殺は美琴の的確な行動により阻止することができたのだった・・・・

また、数分後

当麻「まあ、そんなわけで探索はこれで終わり、下に戻ろうぜ」

美琴「うん」

当麻「あ・・あれ？」

美琴「どうしたの？」

当麻「ドアが開かない」

美琴「ちょっ！？それどういうこと？」

ガシャン！ガシャン！カチャッ！カチャ！

当麻「あはははは・・・・美琴さん？冗談抜きでいたずらは止しましょうや？」

美琴「そ・・それはこっちのセリフよ！あんたこそ、窓は自動ロックってことは先に言いなさいよね！」

当麻「え？窓にそんな高性能な機能はないはずだぞ」

さっきまで空いていた窓がいきおいよく閉まり、鍵が勝手に掛かっていった・・・当麻の言うとおりこの家には自動ロックという高性能なモノはこの部屋には存在しないのだ・・・

「「・・・・・・・・・・」」

ガタン！シャーーーーー！！

美琴「きゃあああああああ！！」

当麻「な・・なんだ！？」

いきなりカーテンが閉まり、部屋の中は暗闇になった。

ガタン！ガタン！・・・・・

美琴「ね・・ねえ・・・さっきいた場所から音が・・・・」

当麻「か・・確認するしかないよな・・・」

二人は先程いた場所に行ってみる。そのとき、美琴はガタガタ震えながら上条の腰に張り付き、どこぞの小動物のような感じをしていた。

ガタガタガタ・・・・・

音がするのは上条家家系図の巻物の木箱の横にあったという日本刀の木箱から音がしているのだ。
まるで外に出たがっているような音を立てていた。

美琴「ちょっと！危ないわよ！」

当麻「中を確かめないとわからねえだろ。もし魔術たぐいならすぐに対処出来るし」

美琴「魔術・・・ってなによ」

そんなこんなで当麻は日本刀を元に戻した木箱の蓋を開ける・・・・
しかし、中身は今までと変わらず綺麗に保管されていた状態・・・

何も変わっているところはなかった

当麻「何もないな・・・」

美琴「あれ？蓋の裏に中貼ってあるわよ？」

当麻「はい？」

たしかにそこに紙らしきものが貼ってあり、何か書いてある。

当麻「ぶは！？行書体かよ！？か・・解読できねぇ～～～～」

美琴「たく、高校生なのに読めるように勉強しなさいよね。え～～～と」

封印を壊し運命を変えるそこのお前！、お前は妖刀『幻破』を扱う資格ある。この俺、上条当麻に代わり戦国の世を駆け走り、上条の礎を築きやがれ！・・・ちなみに拒否権はねぇ。もし、抵抗もしくは逃げだそうとするならお前とその周りのモノも一緒に吹き飛ばーーーーーーす！

初代当主　当麻

上条家

「「・・・・・・・・・・・・」」

美琴「あ・・・あんたのご先祖さまって・・・・色々と面白いこと書くわね・・・・ってなにこれ！？行書体だけど、現代文！？」

当麻「とにかく、早くここから出るぞ。御坂！窓割っても壁こじ開けていいから早くここから」

美琴「そうね。色々とやばそうね。新築した家を傷つけることになるけど」

当麻「構わない。学園都市第三位のレールガンの力を使ってでも逃げ道を作ってくれ！」

美琴「あんたの右手は使えないの！？」

当麻「ぜんぜん右手が反応しないだよーーーー！！」

美琴「仕方ない。ちょっと出力が高いから余波に気を付けなさいよ！」

バチッ！　バーーーキン！

美琴「ちょっと!?なんでレールガンが使えない!?あ・・あれー!?電流が出せない!?」

当麻「まさか・・・・ここの部屋全体が幻想殺しに似た空間になってるわけ!?」

気づいた時にはすでに遅し・・・この部屋の鍵が全て締まった瞬間からここは超能力や魔術が効かない結界になっていたのだ

「拒否権はねぇと書いたはずだぞ」

美琴「ちょっと、なに変なことを言ってるのよ!」

当麻「おれじゃねえ」

「とっとと仲良くタイムスリップしやがれ!!」

その瞬間、部屋の中心にブラックホールみたいな穴が周りのものを吸い込み始めた。

美琴「きゃあああああ!!」

ガシ!

当麻「御坂、絶対に手を離すなよ！」

美琴「分かってるわよ！だから、絶対に手を離さないでーー！！」

吸い込まそうになった美琴をギリギリキャッチした当麻だったが、体勢的にかなり苦しい形となり、今にも吸い込まれそうだった。

ずる・・・

美琴「きゃあああああああ・・・・」

当麻「みさかーーーーーーーー！！」

とうとう手が滑り、美琴は暗い光を放つ穴の中に吸い込まれていた・・・・

当麻「チクショーーーーー！！」

漢、上条当麻！女の子一人を犠牲にしてまで逃げようと思わない。当麻は自ら穴の中に飛び込もうとする。

「忘れ物だぞ」

当麻「うわ！？刀？」

「それはお前のモンだ。あっちでうまく使えよ」

上条の手に飛び込んできたのは妖刀『幻破』・・・そして、飛んできたところに誰かが立っていた。

当麻「あんたが俺のご先祖さんか！何でこんなことすんだ！」

「こういう定めだ。まあ、適当に恨んでくれ」

当麻「くそ！御坂が吸い込まれていなければ、こいつの幻想をぶち殺せたのに・・・」

「・・・・あ！言っておきたいことがあった。」

当麻「ん？」

「あのお嬢さんと将来のお嫁さんとお幸せに・・・・後、子供いっぱい作れよ！」

当麻「てめぇーーーーーの幻想ーーーーーぶちこwあああああああああ

あああああ！！」

そして、上条も完全に吸い込まれ、穴は閉じていった・・・・

「さて、戦国時代でもうまくやれよ・・・・お二人さん・・・直に仲間が来てくれる・・・・・」

そして、ご先祖の霊の姿を消し部屋は元の形に戻っていった・・・・

続く・・・

始まりの家系図（後書き）

今回は上条当麻が飛ばされて終わりました・・・

次回から本番！戦国時代に飛ばされた当麻と美琴！二人の運命はいかに・・・

では、次回も楽しみにしていてください！

ご感想なども受け付けておりますので、気軽に思ったこと書いてもらえると嬉しいです！

協力

当麻「いたたた・・・・ここどこだ」

辺り一面が樹に囲まれ林の中に上条当麻は倒れていた。
さっきまでダンボールの山が連なる2階の奥の部屋にいたはずだが・・・

当麻「あっ！そうだ。御坂！御坂はどこだ！？」

起き上がるとそこには御坂の影がなかった。あるのは飛ばされる前に先祖の霊から渡された細かい装飾が施された日本刀のみだった。

当麻「俺と違うところに飛ばされたのか・・・おーーーい、御坂ーーー！」

返事が返ってこない・・・どうやら、近くに居ないようだ。

当麻「どうするか・・・・あ！そうだ。ケータイがあるじゃないか！あいつとはペア契約でお互いアンテナ同士、だから通じるんじゃ・・・」

ケータイを取り出し、電話は試してみる・・・・

当麻「お！繋がった！さすが学園都市製だ。性能がいいぜ！」

思ったとおり、電波は繋がった。しかし、なかなか出ない・・・

当麻「だめだ。電話に出ない・・・あいつになんかあったのか？」

ガサガサ！

当麻「！！」

突然の林の中から何かが動く音が響く、当麻は地面に落ちている刀を取り、そのまま構える。

当麻「誰かそこにいるのか！？御坂か！？」

声に気づいたのか。物音が近づいてくる・・・・そして！

？？「御坂？誰だよそれ？」

現れたのは学生服を来た男性だった。当麻は少し安心したのか、構えていた鞘付きの刀を下げる。

当麻「なんだよ。びっくりしたぜ。飛ばされたと言っても、結局戦国時代じゃなくて、近くの森林じゃないか」

??「お！お前もこの時代に飛ばされてきた口か！よかったぜ！こんな所で迷子なると思ったぜ！」

当麻「はい？今、なんて言いました？」

??「だ～～か～～ら～～～戦国時代に俺以外で飛ばされてきた奴がいるって嬉しいって言ってんの！」

当麻「う・・嘘だろ・・・ま・・まさか、本当に・・・」

??「戦国時代だよ。ここ」

当麻「ふ・・・」

??「ふ？」

当麻「ふこーーーーーーうーーーーだーーーーーーーーーーー！！」

??「うお！？なんていう馬鹿声」

林の中でお決まりのセリフが響きわたる・・・・

数分後・・・

当麻「へえ～～～それであなたもここに飛ばされたんせうか」

??「ああ、俺の名は相良良晴だ。ちなみに俺は高校2年の17歳だ」

当麻「先輩ですか。俺は上条当麻です。高校1年で15歳だ」

良晴「んじゃ。当麻でいいんだな」

当麻「はい、好きなように相良先輩」

良晴「よしてくれ。俺は先輩と言われる立ちじゃない」

当麻「では良晴と呼ばせていただきます」

良晴「OK！」

自己紹介の次は現在の状況確認と今後の行動について、相談中・・・

良晴「その御坂という子も同じ世界から飛ばされてきたのか」

当麻「そうなんだが、ケータイにも出ないから無事なのか。わから

ないんだ」

良晴「ん？ここは戦国時代だぜ？ケータイが使えるわけないだろ」

当麻「あいつと俺のケータイは特別な機能がしてありまして、どこに行っても連絡が取り合えるようになってるんですよ」

良晴「いいな～～俺もそんな高性能なケータイが欲しいぜ」

当麻「でも、一応はケータイで連絡が取り合えるのでメアド交換だけはしておきますか？」

良晴「お！そうだな。どんな所でも連絡が取り合えるのはこの時代ではできないからな」

主人公達はお互いのメアドと電話番号を交換するし、繋がるか確認した後、話を戻す。

当麻「それで、これからどうしますか」

良晴「それなんだが、今この下の方で戦が行われているんだ」

当麻「まじかい・・・ならここから離れますか」

良晴「いや、離れるんじゃなくて参加する」

当麻「なっ！？正気かよ！？」

良晴「ああ、正気だよ」

良晴の血迷った発言に当麻は驚く

当麻「戦に参加してどうするんだよ」

良晴「戦って功績を立てて侍になり、俺は大名になる！」

当麻「ちょっ！？大名！？」

良晴「ああ、俺はどうしてもならなきゃならないんだ」

良晴の話では、良晴は戦の中に放り出さられ、絶体絶命の所を木下藤吉郎という足軽に助けられたことが始まりだという

当麻「木下藤吉郎・・・・あれ？よく歴史漫画の主人公で出てくる後の豊臣秀吉！？その人はどこに！？」

良晴「・・・死んだよ。流れ弾に食らってな・・・」

当麻「まじかよ」

そして、良晴は藤吉郎の夢を引継ぎ、天下の大大名になると約束して、安らかに木下藤吉郎は永遠の眠りに付いた・・・

そう、良晴の行動は自分の存在のせいでのちの英雄を殺してしまった償いなのだ。そのためにも良晴が豊臣秀吉としてこの時代で生きていけないと決意したのだ。

良晴「だから、頼む！俺は藤吉郎のおっちゃんの夢を叶えてやりたいんだ！俺はある程度の知識だけで実戦はないんだ。二人でならこの戦国の世を切り抜けられる。だから・・・」

当麻「・・・・よし、分かった！俺はアンタに協力するぜ！どの道、どこも行くところはないし」

良晴「ヨッシャーーーーー！心強い仲間は増えた！五右衛門～～！こっちおいで～～～～！！」

サッ！

五右衛門「おそばに・・・」

良晴「紹介するよ。俺の仲間の蜂須賀　五右衛門だ。三十文字以上の話をすると噛んじゃうかわいいやつだ」

五右衛門「む！相良氏、あまり人の弱点を言わないでほしゅいでごじゃる」

「「あ・・・噛んだ」」

五右衛門「む・・・」

見かけが小学五年生で忍者の格好した少女・・・蜂須賀　五右衛門元は藤吉郎の部下だったが死亡してしまい、代わりに良晴と契約し部下となっている。見かけによらず、隠密と戦闘能力が高く、今の良晴には必要不可欠な存在だ

当麻「俺は色々と修羅場を経験しているし、実戦にも自信がある。でも、人殺しはパスな」

当麻は学園都市での色々な事件で修羅場には慣れている。そのため、少しのことでは動じない。ただし、今回は幻想殺しが役に立つことはなさそうだ。

良晴「ふむ〜〜そうだな。人殺しは極力避けたいな・・・さてどうするか」

五右衛門「相良氏、織田側が押されておりますよ」

良晴「なんだって！？」

現在の戦の状況では、良晴達が加勢する予定の織田軍が押されており、本陣に今川軍が奇襲がかけられていると報告が入る。

良晴「ふふふ・・・当麻、どうやら初陣は人を殺さないで済みそうだぞ」

当麻「おう、そうだな。人助けって方がしっくりくる」

五右衛門「相良氏、上条氏、出陣でございますか？」

良晴「ああ！では、俺達の雇い主の所に向かうか！当麻！」

当麻「了解だ！」

良晴はそこらへんで落ちていた槍を拾い。上条は持っていた刀を握る。

そして、二人は織田軍本陣の救援に急行するため、全速力で戦地に赴くのであった・・・・

続く・・・

協力（後書き）

当麻と良晴が協力、いざ、行かん戦地へ！

次回は織田軍の危機を救うべく当麻達が奮闘します！

果たして、漢達は織田軍大将を救い、無事に織田軍に士官できるか・・・

では次回も楽しみしていてください！ご感想などもお待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2119y/

とある戦国漂流

2011年11月5日03時09分発行